

子どもと
話そう **性**のこと **愛**のこと

「なぜ、性教育を？」とよく聞かれます。私が性教育の仕事をはじめたのは1965年。文部省(現・文部科学省)の婦人教育課長だった、塩ハマ子さんから、思春期の子どもを持つ母親への性教育教材「明日では遅すぎる!」の制作を依頼されたのがきっかけです。男性有識者らによって定められた「純潔教育基本要項」の「処女性の尊重、貞操観念の確立」といった内容では、もう追いつかない時代。若い女性の書き手を探していたのでしよう。

当時の私は、ミュージカルや児童劇の脚本を書くかたわら、NHKや民放のテレビドラマを書きまくっていました。そこに持ち込まれた不慣れない性教育の仕事ですから、慌てて性科学、性心理学などの専門家の許に走り、性教育先進国だった北欧諸国の取材を始めました。

ところが時を同じくして、法務省からも少年院の矯正教育教材「光を求めて」の制作依頼が飛び込んできて。私は2年間、全国の少年院を回り、入所中の少年少女の声を録音、編集することになりました。

◇ 1 ◇

なぜ性教育を? —少年院での出会いが原点—

取材現場で私を慕って、その過酷な成育歴を語ってくれる少女たちと接するうちに「この子たちが正しい性教育さえ受けていたら、こんな悲劇(親による性虐待、家出、売春、薬物依存、逮捕、少年院措置)は防げたかも」と痛感しました。

私はそれまでの脚本家・放送作家という職業と決別し、性教育の絵本や翻訳本の出版などに没頭し、気が付けば50年経過。今も、学生、教職員、保護者対象の「性Ⅱ生」に関するゼミや講演、教材の制作、性的問題を抱えた10代の少女少女たちの相談などの活動を続けています。



ニッポン放送のスタジオで。1965年ごろ